

「色」を楽しむ

今瀬 一博

「色」を詠み込んだ春の作品を三回ほど続けて紹介してきました。今回は、まだ取り上げていない、「黒」「金」「銀」を詠み込んだ作品、「はなだ」等、固有の名称を持つ色を詠み込んだ作品の紹介・鑑賞を通して、色の用い方について考えてみます。

【黒】

色としての「黒」は、煤や墨のような色を指しますが、「黒潮」「黒酒」「黒砂糖」のように、黒みがかった色にも用います。学校の制服や、礼服、喪服にも用いる「黒」ですが、制服なら、規律正しく聡明で改まった印象を抱きます。礼服や喪服の「黒」なら、改まったというだけでなく厳肅なイメージです。裁判官の法服などは、何事にも染まらない公平さの象徴でもあります。象徴という点で言えば、日本文化の中の「黒」は、「謎」、「夜」、「未知のもの」、「超自然的なもの」、「死」、「不運」などに通うイメージがあります。ただ、俳句は「言霊」と言えますし、挨拶性を持つこともあるので、特に「死」や「不幸」を想起させるような用いられ方はまずしと言えるでしょう。一方で面白いのは、「黒南風」のような言葉で、梅雨の時季の重く湿った風を、感覚的に「黒」と捉えたのは、日本的感性の輝きを感じます。

では早速、「黒」を詠み込んだ作品を見てみましょう。

蝌蚪生れ黒き塊まだ解かず

右城 暮石

暮石のこの句は、「黒き」を密集した生まれたての「蝌蚪」に用いました。「蝌蚪」が黒いのは当たり前なので、それを詠んでも句になりません。この句は「塊」を「黒き」と捉えたところに発見があります。「蝌蚪」一匹一匹では小さ過ぎますし、動きも忙しいので、「黒」を感じる前に他の印象が先立ってしまうでしょう。これは読み手にとっても同じなので、色を詠み込むときには、対象の何（どこ）に色を感じたかを意識すべきです。

乳牛の黒き眼バレンタインの峽

大峯あきら

動物の目を「黒き」と詠んだ作品は、他にもあると思います。掲句の特徴は、酪農で飼われる「乳牛」という生活臭のある素材に、聖なる「バレンタイン」を合わせたところです。場所が都会ではなく「峽」である点も特徴的です。世間では、チヨコレットを送り愛を告白する日でありながら、そんな華やきを知らぬ「峽」の「乳牛の黒き眼」は静かで澄んでいます。この感じは「黒き」と言葉にすることで、更に際立ちます。やはり黒なら黒を詠むにも必然性がないと、単なる説明になります。

その点で、同じく生き物（若駒）の眼を詠んだ原石鼎の次の句は、色は出していません。

若駒の親にすがる大きな眼よ

原石 鼎

作品に色を出すのか出さずに感じてもらうのか。どこまで色を出すのか、どこから先は感じてもらうかといった見極めもまた、難しくも面白いところです。石鼎の句の若駒の眼は、大きな黒い眼だったのでしたが、この事実どおりに「黒き眼よ」としては、「すがれる」というこの句の眼目は生きてきません。これを生か

すには「黒き」より「大黒」が相応しかったわけだ。

漆黒にとどく入学服と帽と 皆吉 爽雨

「制服・制帽」の黒を詠んだ作品で、「黒」の熟語の「漆黒」を用いたところがポイントです。光沢のある黒に用いる言葉ですが、同じ「黒」でも、このような一歩踏み込んだ表現は参考にしたところですね。袖を通す前なので、改まった印象よりは今後の学びの日々への期待と喜びが強く出ます。何物にも染まっていない無垢の制服・制帽から受けた印象が、「漆黒に」です。

羽根ひろぐ岩礁の鵜の黒十字 秋元不死男

黒い鵜を「黒」と詠んだ作品。それでいて当たり前ともくどいとも思わせません。不死男のこの句は、下五の「黒十字」という一種の造語が効果的です。羽を休めている鵜が黒いのは当たり前なので、それを「黒い」と言っても感動はしません。しかし岩礁に羽を大きく広げ、体全体が十字を為したとき、頸と羽の縦横の長さとともに鵜の「黒」が際立ったのを、不死男は見逃しませんでした。これも色が際立った瞬間を捉えた見事な描写です。

【金・銀】

色としての「金」は、光沢のあるオレンジがかった黄色、則ち金色に輝く色で、富と権力の象徴のような色です。一方、「銀」は、美しい白い光沢を放つ色です。「白銀」や「しろがね」とも呼ばれ、その輝きや用途から、「金」ともども宝飾品や貨幣として古くから利用されました。他の色と違う特徴は金も銀も「輝く」ことです。この特徴は句作にも生かしたいところです。

では「金」、「銀」を詠み込んだ作品を鑑賞してみましよう。

白靴の中なる金の文字が見ゆ 波多野爽波

梅雨の夜の金の折鶴父に呉れよ 中村草田男

わが影を金のふちどる泉かな 野見山朱鳥
残雪や北欧に買ふ銀の匙 吉野 義子

「金」を用いた三作品は「豪華絢爛」なものではなく、明るく輝くものを描写しました。他の色とは違う「金」の輝く特徴を上手く用いています。「金の文字」も「折鶴」も「影の縁」も印象鮮明です。義子の句の「銀」は、「北欧」のイメージの具体化です。金とは違う、やや鈍い光を持つ「銀」が効果的です。

ところで、日本の古典などには、「特異な色」を指す言葉が多くあります。例えば次の句の「はなだ（縹）」、「ぎんねず」等がそれです。「はなだ」は明度の高い薄い青色、「ぎんねず」は、銀色を帯びたねずみ色ですが、例句を鑑賞してみましよう。

紫陽花やはなだにかはるきのふけふ 正岡 子規

ぎんねずに朱ヶのさばしるねこやなぎ 飯田 蛇笏

これらの句の正確な鑑賞は、「はなだ」、「ぎんねず」がどんな色なのか分からなければ出来ません。特に子規の句は、七変化と言われる「紫陽花」が日に日に明度を増し「はなだ」に変わってゆくところを詠んだ微妙な作品なので尚更です。水色や薄青よりもくっきりした「はなだ」が動きません。一方「ぎんねず」は、「ねこやなぎ」を知っていればある程度想像は出来ます。句としては「朱ヶのさばしる」の眼に驚きます。知らなければ分かりませんし鑑賞できませんが、これは俳句に限らず文学とはそういうものです。しかしこのような固有の色は、より色が限定的になる分、知らなければ詠めませんが、一句の風情の中で適切に用いると、句が趣味的になったり、知識の披露になる可能性もあるのので注意が必要です。要は「色」を詠み込む際には、一句の風情にピタリと嵌まるかどうかを考えて用いるべきだと思います。